雪の中からこんにちは、飼い主さん！

ものもらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の中からこんにちは、飼い主さん！

【Ｎコード】
Ｎ９１２９Ｚ

【作者名】
ものもらい

【あらすじ】
凍土にて、ウルクススの亜種なのか一匹だけ黒い兎がおりまして、大きいし色は違うしベジタリアンのくせに強いしで、同族から嫌われてハブられていました。
しょうがなく兎はただ一匹、日々を寂しく過ごしてきたのですが――ある日、通りすがりの人間と遊んでみようと思いました。
するとまあ、当然ながらギルドから危険視され、討伐クエストが出されるわけで……凶悪な兎を退治しにきたハンターさんが、やって来てしまったのです。

ですが色々あってそのハンターさんに懐いてしまった兎、遊んでくれるハンターさんとずっと一緒にいたくて、『凄い人』に頼んで人間になれる山菜を貰い、ハンターさんの前で食べてしまいました。すると巨大な黒兎は一人のほっそりとした女の子になってしまったのです！

……これは懐かれたハンターさんこと『飼い主さん』と元兎少女の、のんびりふわふわバケツをブン投げたくなるような、恋のお話。

※モンハンを最後まで終えて無い＋設定もうろ覚えなのでかなりおかしい部分がありますので、ご注意ください。

1．初めまして、元兎のハンターです

雪の中からこんにちは。お元気ですか？

――ねえねえ、お元気ですか？ねえねえ。…と私は一生懸命跳ねてみるのですが、『飼い主さん』はまったく反応してくれません。折角温かいテントから抜け出して雪の中に潜り込んで飛び出してみたのに。飼い主さん酷いですっ。

――――え、『飼い主』って？

…ふふふ、この人は私の飼い主なのです。何故なら私は兎。元兎の現人間ですから。

私は真っ白な雪兎の中で、ただ一匹だけ黒くて――――皆によくもきゅもきゅされましたのでもきゅもきゅし返したら、何故か皆、私に構ってくれなくなりました。

寂しくて雪の中に埋もれてたり、雪玉を作っては通り過ぎる人間に見せたりしたのです。構って欲しくて猫パンチならぬ兎パンチもしたのです。そしたらやっぱり皆逃げちゃって、一人しょんぼりしてたら飼い主さんが来たのでした。

私は同族と同じ匂いのする飼い主さんに喜んで飛び付きました。ぐ

るぐるしました。兎パンチしてみました。そしたら雪の山に埋もれてしまったので、一生懸命引っ張り出しました。

でも何故だか飼い主さんは起きないし震えているので、くっついて温めてあげました。
その間、蜥蜴さんが興味深そうにこっちを見てたのですが、私と目が合うと何処かに行っちゃって。寂しくてそのままお昼寝することにしたのです。

———うとうとしていたら不意に飼い主さんがもぞもぞ動きだしたので、私も目を覚ました訳ですが……何故か飼い主さん、ゴロゴロ転がっていました。
私も真似てゴロゴロしたら飼い主さんに蹴られてしまい……多分その時の私は（´・ω・、）って顔してたと思います。飼い主さんも似たような顔をしてました。

それから飼い主さんはゆっくり手を伸ばして、もしゃもしゃしてくれたので鼻先を押し付けてみました。ああそれで…髭を、引っ張られました…。

でも、仲良くじゃれ合ってたのに、飼い主さんは何処かに行ってしまったのです。

私は寂しくて寂しくて、ずっとそこで丸まってました。そしたら陽が昇った頃に飼い主さんがまた来てくれて、お肉を寄こしてきましたが私はベジタリアンなので拒否りました。そしたら今度は飼い主さんが（´・ω・、）って顔をして、それを見た私も似たような顔

をしたと思います。

次の日も次の日も来てくれたのですけど、やっぱり帰っちゃう飼い主さんが恋しくて、雪山の凄い人に聞いてみたんです。会いたいよーって。

凄い人は「お前は人を見るともきゅもきゅしちゃうから人里には行っちゃ駄目なんだ」って言われました。人間は弱くて、もきゅもきゅすると死んでしまう。そうすると怖い人に滅多刺しにされて、飼い主さんに悲しい思いをさせるんだよ、とも言われました。

じゃあ私はずっと独りぼっちなの？って聞いたら、凄い人はうーんって悩んだ後、小さな声で教えてくれました。

「一つだけ、方法があるけど、そしたら君はもう戻れないし、自分の身も十分に守れなくなるんだよ。それでもいいかい？」

私は当然頷きました。

何かあっても何とかなるだろ精神で生きてきましたから、あんまり深く考えなかったのです。

凄い人は不思議な山菜を渡すと、飼い主さんの前で食べなさいとだけ言いました。き、き、きせいじじつ？…を作ればイケると言っていました。

それで今度は美味しそうな葉っぱを持って来てくれた飼い主さんが

遠くに見えた瞬間にささっとぺろっと食べて、飼い主さんが寄ってくる頃にはもう、ぷるぷる震えてました。

飼い主さん…すごくキョドってました。雪を孕んだ風に一瞬視界が閉ざされた後、すごく寒かったのを覚えてます。耳が痛かったのも覚えてます。

飼い主さんは何も言わないで私を見てまして、ややあってから私に剥がれた（？）毛皮をしっかり着せて手を引いてくれたのですよ。その後色々あったけど、飼い主さんは飼い主さんになってくれました。そっけないけど心の広い人なのです！

だから今だってそっけなく掘り続けてるけど、あと一分したら私の好物の林檎をくれるって分かってます。
そのまま黙って林檎を齧ってたら、最初に言いつけられた――――テントに戻って火の番をしてろと頼んでくるのです。私が火の番をしながら寝てる頃には帰って来て、また林檎をくれるのです。偶に苺もあるので、わくわくしちゃいます。

「ほら」
「……」

――――でも、本当に偶に、意地悪をしてくるのです。
目の前に転がってる肉。機嫌が悪いとこれを投げてきます。そういう日は黙っていなくなって心配かけてやるのです。

私は震えていた猫を一匹掴んで、兎の頃よく昇ってた場所に腰掛けます。暇だったので雪玉を作ってみました。…兎の頃と違って、当時の雪玉を作るのはちょっと時間が必要なのです。

そしてやっと出来た雪玉！これを――――飼い主さんの出口近くに落として気を引くのですよふふふ。よいしょ、よいしょ、てい。

「ぎ――――――！！」

「ちょ、」

えっへん。と胸を張る下で、何かの鳴き声と隣から猫の「ちょ、」が聞こえましたが無視です。二個目を作りましょう――――投下！

今度は何の声も聞こえません。猫は毛を逆立てて丸まっています。私は緊張している猫を撫でると、遥か下から飼い主さんが私を呼ぶ声が聞こえました。

「――――黒ぉぉぉぉぉ！！降りて来いっお前はなんて狩りをしてるんだ！！」

……狩り、って。何の事でしょう？

＊

「ご注文は？」
「肉」
「葉っぱ！」
「え……」
「……――――サンドイッチで」

あの後、飼い主さんが見事仕留めた…えーっと、何とかを売ったりしたら余裕が出たので、飼い主さんが何か買ってもいいよって言ってくれました。

普段はあまり買ってくれないのです…生活が苦しいのかなと思って猫に聞いたら、飼い主さんは医療費とか将来の事も考えて貯金したりとか、色々考えてお金を使っているだけだと言っていました。…その言葉通り、どんなに高くても武器と防具とかには妥協しませんもの。

私は家計簿をつけてる飼い主さんの膝を枕にして火に当たる時間が好きです。偶に大人しくしてると二三回頭を撫でてくれるのですよ。

――――あ、葉っぱと何かが来ました。美味しそうです。

「……」
「…おい、サンドイッチを早々に分解するな」
「だって、お肉が…」
「食えよ、それぐらい」
「……」
「いただきます、っと」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……ぐすん」
「――――〜〜っ、一口食えよっ一口！」

そう言われて突っ込まれたのは飼い主さんの油たっぷりのお肉でした。戻しそうですが飼い主さんの手に塞がれて戻せません。しょうがないので飲み込みました。

「ったく…ほら、取ってやったぞ」
「葉っぱ！」

口直しに食べる葉っぱはとても美味しいです。飼い主さんが淡々と口に入れてるお肉よりも美味しいのです。
でも飼い主さんも兎仲間も、お肉が一番美味しいと言います…葉っぱしか食べない私を変な物でも見るように……あ、飼い主さんは「栄養がー」とか「もっと太れー」とか言ってくるのですが。

「……美味しい、です」
「あ？…ああ」
「…あの、美味しい、んです」
「……そうか」
「（，・ω・、）」
「察しろ。家ならまだしも店では駄目だ」

さっき、飼い主さんは私に分けてくれたのに。なんで私は駄目なんですか。

ずっと（，・ω・、）な顔をしていたら、飼い主さんは特別に甘いものを頼んでくれました。
……えへへ、とても美味しいのです。

――でも急いで食べないといけません。
飼い主さんが言うには、これからこの街では花火が上がるそうなのです――――私は急な音や大きな音が苦手なので、そういう音を聞くと固まってしまいます…だから私を遊びに連れてってくれる場所は静かな所が多いのです。

今日は飼い主さんの用事は無いので、居られる限りは私に付き会ってくれるそうですから、私が早くぺろっと食べちゃうのは全然変じゃないのですよ。だから飼い主さん、そんな目で私を見ないで下さい。

私は飼い主さんに口を拭く様に言われたのでゴシゴシ拭いていると、会計を済ませた飼い主さんに促されて店を出ました。

あまり人のいない所なのではぐれる事は無いのですけど、飼い主さんはちゃんと服を掴ませてくれるのです。

「何が欲しい？」
「葉っぱ！」
「さっき食っただろうが」

じゃあ林檎なら良かったんでしょうか…飼い主さんは小物とかを勧めてきますが、食欲の前にはまったく……あ、

「きらきら？」
「あー？…ああ、飾り物屋か」
「……？」
「…ま、お前も女だしな。折角だし買ってやる。何が良い？」
「林檎がいいです」
「……うん、俺が選ぶわ」

駄目出しばっかりなのです…。

だけどあれはどうとかこれはどうとか聞いてくる飼い主さんの駄目出しは嫌いじゃありません。
大きな手が小さな髪飾りを摘まみ上げるのをじっと見ながら、されるがままになってるのも、嫌じゃありませんよ。

服もですけど、誰かにあげようとしてうだうだしてる姿を見るのも楽しいのです――――あれれ、今回は早く決まっちゃいました。

飼い主さんは値切らずにそのまま買い付けると、私の髪にそっと差してくれました。
それは青い硝子の髪飾りで、頭を動かすとしゃりしゃり音を鳴らします……ちょっと、不快。

でも飼い主さんが小さく「まあまあだな」って言ってくれたので、頑張って慣れます。頑張って……うーん。

「…どうした？」
「あ…――――あり、がとう、ございます」
「いや…」

じゃあ、次行くぞ、と頭をわしゃわしゃしてくれた時に鳴った髪飾りの音は、不快じゃありませんでした。

＊
無口だけど面倒見のいいハンターさん×悪戯好きの兎少女

1．初めまして、元兎のハンターです（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

＊兎少女⇒名前は「夜（ヨル）」真っ黒な髪の女の子。力持ち過ぎてヤバイ。悪意の無い、本当に悪意のない悪戯にトラブルを起こす兎さん。
兎時代（ウルクスス）の名残は髪以外に無い。兎耳を期待した人はごめんなさい。
雪ん子なので肌は白いしベジタリアンだから細い。
装備はウルクススだった自分の毛皮で出来た装備。装備屋の店主が夜に合わせて作ったので、…オリジナル装備なのかな。ちなみに毛は黒って表記したけどチョコレートを黒くした感じ。

＊飼い主さん⇒名前は「咲（サク）」二人合わせて咲夜さん！…というのは置いといて、薄茶（セピアゴールドの安っぽい感じ？の色で）の髪の青年で、家計簿をつけたりする家庭的なハンターさん。林檎の兎をよく作ってくれるよ！
夜のことは兎時代に「黒」って呼んで可愛がってた（実は小動物大好き。夜は大きいけど動きが小動物過ぎて可愛かった）その名残。
「飼い主さん」呼ばわりは非常にヤバい、明らかに変な性癖の人と見られかねないので、公の場では「咲」と呼ばせてる。

＊本当は竜にしようかな、って思ったんですがちょうど雪の時期⇒兎！に。

いとう／かなこさんの「と．あ．る．竜．の恋．の．歌」を聞いてたら人外×男で何か書きたかったのが始まりです。

とても壮大で美しい歌ですが、本作は壮大さ皆無でございます…。

2．得意な武器はハンマーなのですよ

お布団の中からおはようございます、飼い主さん。

私は放すものかと布団をしっかり握りながら、朝ご飯の香りがする飼い主さんに言いました。

……でも私の必死の抵抗虚しく、飼い主さんは容赦なく私から布団を奪うのです…そして首根っこを掴んで猫達の待つ厨房に連れていかれました。

私としてはまだ丸まっていたいのですけど、ご飯の匂いを嗅いだらやる気が起きました。飼い主さんの隣に座って、一緒に「いただきます」って言って、葉っぱが巻かれた分厚いのが数個浮かんでいるスープに手を付けます――――。

「む……っうぅぅぅ…！」

「おい、俺の隣で吐いたらお前もコレみたいに巻いてスープにすんぞ」

「…う、ぅそつき…」

「俺が一体なんの嘘をついたんだ」

酷い酷い酷い！葉っぱの中にお肉が入ってるだなんて酷い！

飼い主さんは朝から意地悪だ。残したらきっと怒って無理矢理口に入れさせるし、吐いたら無言で責めるだろうし。でも食べたくないし…。

「――いいか、これはお前の為なんだ。ただでさえ棒みたいなのにお前…そのままだと血が作れなくなって倒れんぞ」
「……」
「これでも肉を少なめにしたんだ。葉っぱの裏に芋虫が付いてると思って食えば別に抵抗ないだろ」
「…あ、そっか」
「……否定しろよ…！」

飼い主さんは頭を抱えて「元は兎だしな…」とか「いや、でも女として芋虫が付いてる葉っぱを食っても平気、って考えは…」とかぶつぶつ言ってるのを見てたら、猫達がテーブルの下から「一気！一気！」と囃したてます…うーん。

「……もむっ」
「……！」
「む……う、ぅぅ…」
「…食いながら呻くなよ…」
「ん……い、芋虫食べましたっ」
「これは芋虫じゃねーよ！」
「む――――！」

二つの意味で突っ込まれました。
もうお腹いっぱいです…食べたくないです…でも飼い主さん怒ってるし…うっ

「よしっ飲み込んだな！？」
「……」コクコク

「これで最後の一個だ。これが食えたらそこの新鮮野菜サラダ食っていいぞ」
「……あ――」
「ああん？」
「（´・ω・｀）」

あーん、って。さっきみたいにして欲しかっただけなのに……ぐすん。

＊

「……（´・ω・｀）」
「――おい、そんな顔してんな。採集クエスト行ってくるだけだろ。むしろ下級クエストにお前の敵はいないだろ」
「……（´・ω・｀）」
「だからそんな顔……しょうがないだろっ俺は今日はどうしても付き合えないんだっ船に乗んないといけなくてだなっ」
「……（´・ω・｀）」
「お前には向いてないクエストなんだ。ほらっ今日は弓の練習しに行くって約束したんだろ。遅刻は駄目だ、早く行きなさい」
「……」

「……」
「……（，；ω；、）」
「…あの…あれだ、変な人に付いてったら駄目だぞ…」
「……（，；ω；、）」
「……送りぐらいは行ってやるから。待ってろ」

黙って泣かれるのが苦手な飼い主さん。焦り過ぎて刀じゃなくて包丁を持ってるのですが……ちなみに待ってる間も泣いてました。だって飼い主さん、今日は夜遅くに帰ってくるのです…一人ぼっちです…。

「旦那さん、砥石忘れてるにゃー」
「あ、そうか…」
「旦那さん、それはただの石にゃー」
「……」

飼い主さん……エプロン外すの忘れてます…（，；ω；、）

【集会浴場】

「――――着いた、な」
「……（、・ω・、）」

「…そうだな、黒が採集頑張ったら美味しいもの作れるかもしれねぇな」
「本当ですか！？」
「……お前って、食欲が満たされればなんでもいいんだな…」

ほら、クエスト頼んでこい。と飼い主さんに受付まで連れて来られたのですが、にこにこ笑ってる受付嬢さんは最近来られた人間なので、慣れてなくて…結局、飼い主さんが受付を済ませてくれました。

――――飼い主さんは早く自立しろと言います。でもそういう割には甘かったり面倒を見てくれます。だけど意地悪で…複雑な人間です。

なんでも飼い主さん曰く、人間というのは面倒くさいモノなのだそうで、私は子供だから分かっていないだけなのだそうです。それはとても…外見年齢と精神年齢が釣り合ってない私には危ない（何故か知りませんが）事らしいので、私の人間関係には基本的に飼い主さんが間に入ってます。

なので向こうからやって来るお二人も、当然ながら飼い主さんのお友達ですよ。

「夜（ヨル）ちゃーん！お待たせー！」
「…？咲（サク）、お前なんでこんな早く…？」
「――――ふふふ、聞いちゃ駄目だよスウィーツ！咲ちゃんは心配性で小さい子大好きな人なんだからっ」

「チェダー…此処で刺身みたいに捌いてやってもいいんだぞ…？」
「やーん怖い！助けてスウィーツー！ロリコンが襲ってくるー！」
「このッ」
「あ〝ー！待った、ごめん、悪かったから、落ち着け咲。こいつはこういう風にしかスキンシップとれないんだ」

二人の間にスウィーツさんが割って入ると、飼い主さんは怖い顔でチェダーさんを見た後、飼い主さんの背中に隠れていた私を引っ張り出しました。

「？」
「いいか黒、絶対にこのアマの言う事する事は真似するなッ弓の使い方だけ学んで来い！」
「あ――――」

言うだけ言うと、飼い主さんは背を向けて何処かに行ってしまいます。
そうすると私は急に心許無くなって、慌てて飼い主さんの装備の端っこを掴みました。

「ま、待って下さい。見送ってくれないのですか…？」
「……俺は送りだけって言ったろ」
「あっ…か、飼い主さん…」
「飼い主さんはやめろって――――！」
「……（、；ω；、）」
「泣くなよ！？」
「……（、；ω；、）」

すると後ろから女の子泣かしたー！という声が聞こえ、周辺の人は泣いてる私を見てヒソヒソ囁き合ってます。
飼い主さんはごしごし大きな手で涙を拭うと、強く私を引っ張ってお二人の元に連れて行ってくれました。
飼い主さんがチェダーさんと無言で見つめ合っている間にスウィーツさんが手続きを全て終わらせてくれたので、……ついに飼い主さんとのお別れが…（´；ω；｀）

「いいか、二人に迷惑かけんじゃねーぞ。転んで怪我したら、回復薬飲んですぐに傷口を綺麗な水で洗って大人しくするんだ」
「水が無かったら？」
「回復薬でもかけてろ」
「……飼い……――――咲さんも、お気をつけて」
「ああ、…大丈夫だ、別に一人で行くわけじゃないしな」
「……」

お気をつけてと言っておきながら飼い主さんの装備を離せないでいる私の肩に、飼い主さんの大きな手が乗せられました。

「俺のいない間、留守を頼むぞ」
「……」
「…まあ、そんなに家を開けないけどな。夕方から夜までの間、俺の代わりに頑張れよ」

私は声に出せない代わりに静かに頷いて、そろそろと飼い主さんの

装備から手を離します。
すると飼い主さんは「ショボくれてんじゃねーぞ！」と背中を一回叩くと、未練がましく何度も振り返りながらクエストに向かう私を、ずっと見送ってくれました。

＊

――――チェダーさんは銀の髪が美しい、上級ハンターさんです。遠距離の武器しか使えないそうですが、凄い実力の方で飼い主さんも舌打ちしながら認める程の腕前なのです。

装備もとても綺麗な虫さん装備。スウィーツさんとお揃いで、頭の装備も一緒が良いからとカチューシャではなく帽子。紫の色がとてもお似合いなのですよ。

スウィーツさんは濃い茶の髪で、青みがかった銀色の瞳。この前上級ハンターさんになられたそうです。

何だかんだで押しに弱いとか騙されやすいとかお二人（飼い主さんとチェダーさん）から聞いています。それと会う度にお菓子をくれたりするので、私は大好きなのです。

「――――はーい、もっと弦を引っ張ってー…もうちょい、もうちょっと頑張ってー…はい、パーン！」
「…あっ」

お二人は飼い主さんの狩り友で親友（飼い主さんは否定していましたが）のよしみで、主にハンマーを振り回すぐらいにしか能の無い私に根気良く付き合ってくれます。

チェダーさんは普段は子供のように無邪気な人ですが、今のようにご教授くださる時は飼い主さんと似たような雰囲気になります。――私に食事の仕方を教えてくれた時のような…ですかね。

ですが折角チェダーさんが手を添えて下さった私の矢は、何故か途中で落っこちて跳ねて転がります。

「うーん、最後力が抜けちゃったからかな」
「……はい」
「夜ちゃん力持ちだもんねー、下手に力入れちゃうと矢がボキン、だし」
「私に…弓は向いてないんでしょうか…」
「んん、まだ分からないよ？力の加減が分かればいい訳だし…狙いはそんなに悪くなかったと思うんだよねぇ」

私が転がった矢を拾い上げてもう一度構えてさっきよりは強めの力

で射ると、今度は木に刺さったものの――――ポテ、と矢が抜け落ちました。

「……（、・ω・、）」

「うーん、これはこれで才能があるというか――――」

そう言って引き抜くと、チェダーさんは自分の弓をぱちりと取り出して矢を引っ張ります。

目は細められていて、形の良い唇はにやりと歪んでいて、渇いたのか舌で湿らせた瞬間――――鳥さんのお尻に射ました。

吃驚した鳥さんが産んだ大きな卵。凄い凄いと跳ねる私に「でしょっ？」と笑いかけると、弓を仕舞い込んで卵を拾い上げました。

「じゃ、ボックスの所までの護衛、よろしくね？」

「私…が、頑張ります！」

「よしよし、やる気があるのは良い事だぞー」

まあそう意気込んでも、此処は比較的穏やかな子ばかりだから、下手な事しなければいいだけなんですよね…。

一応片手にしっかりと握っている弓をパタンパタン弄りながら、鼻歌交じりに隣を歩くチェダーさんとおしゃべりしてもいいでしょうか…。

「あの、チェダーさん」

「ん？」

「飼い主さんは…今日は何のクエストに行かれるのですか…？」

飼い主さんはたくさんの人の前では咲と呼べと言いますが、チェダーさんとスウィーツさん、村長様の前ではそう呼んでも怒られません。いや、嫌そうな顔はするんですがね。

何でも、飼い主さんが「もしも」の時の為の保険だと、私の正体を信頼できる方にだけ教えていたのです。その「もしも」は何かと聞くと、飼い主さんは答えてくれないのですが。

「あー、確か砂漠だったかな。何か珍しいのが来てるから、船で追って仕留めるんだよ」
「砂漠で舟…ですか？」
「そ。…実は私、熱いのが苦手でさーそのモンスター倒した事ないんだよね」
「私も砂漠は嫌いです」
「まったくだよ。クーラー十本飲んでもフラフラだね」
「それはドリンクのせいじゃ？」
「スウィーツもそう言ってきてね、『いいや、君のせいだよ』って耳元で囁いたら顔真っ赤にして石に躓いてやんのー！もっと弄ってやろうと思ったらボスが来ちゃったんだけどさ、スウィーツは使い物になんないし、結局私が仕留めたわけ」
「チェダーさんはいじめっ子？」
「愛のあるいじめっ子だよ！」

夜ちゃんも咲ちゃんにやってみなよ、きっと反応に困って何やらかすか見物だから！――と大変イイ笑顔で勧められたので、いつかやってみたいと思います。「面白そうです」と私が笑うと、チェダ

ーさんは懐かしむような顔で私をまじまじと見ました。

「どうしました？」
「んん、いやね、故郷の妹に似てるなぁと思って」
「妹さんも髪が黒いのですか？」
「私と同じだよ。そうじゃなくてな――――うん、子供みたいに笑う所が似てるんだろうね」
「子供…」
「そ。見ててこっちがふわふわしてくる感じ。…いいなー、こんな子と寝食共にしてたら幸せだわー、癒されるわー。……あのロリコンが羨ましい…」
「ずっと思ってたのですが…その『ロリコン』って何ですか？」
「ロリコンはねー、小さい女の子が大好きな変態の事だよ。夜ちゃんは外見は１８ぐらいに見えても、中はまだまだ小さな子だからね、あの変態はそのギャップに――――――ひゃっ」

がしゃん、とチェダーさんが両腕に抱いていた卵を落としそうになって必死に抱き直し、私が急いで弓を構えた先には、襲ってきた青い熊さんを追い払っていたスウィーツさんが濡れた手でチェダーさんにデコピンしていました。
どうやら言葉を遮ろうと後ろから近寄って首筋に冷えた手を当てたようです。

「お前な、夜に変な事を教えてんじゃねーよ」
「教えてないですぅー、聞かれたから答えたんですぅー」
「お前が聞くように仕向けたんだろうがっ」

夜も今のは忘れとけよ、と肩に蜂蜜がまだ少しこびり付いているスウィーツさんに頷こうとしたら、チェダーさんが「スwwウィーwwツの、肩ww蜂蜜www」と笑った事に怒ってしまってそれどころでは無くなりました。

「何？蜂蜜でも投げられちゃったの？上級wwハンターなのにwww」
「うるせー！ペイントボールが急カーブして当たらなくてな…もたついてたら蜂蜜が」
「ペイントボールは急カーブする機能が付いてるんですか？」
「急カーブする機能wwとかwwスウィーツのペイントボールって最先端ww」
「うっさいよ！」

ひとしきり笑った後、急いで卵を置いて青い熊さんを皆で倒しに行く事にしました。
これも練習だと、私が射るのを二人が見守りつつサポート、って感じでしたが。

何故か戦闘場所はペイントボールが転がっていてあっちこちに中身が飛び散っていて、チェダーさんがお腹を抱えて笑ったのには熊さんも吃驚していました。

＊

育児もこなすハンターさん＋世間知らずな兎ちゃん＋いじめっ子ハンターさん＋出番の少ない格好のつかないハンターさん

2．得意な武器はハンマーなのですよ（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

＊チェダーさん
私がプレイした時のキャラクター名です。「チェダー先輩」って登録してました（笑）可愛い装備しか着せませんよ！
ユクモ村の中では射撃の腕前はピカイチ設定。だって基本的に今回出てきた人しかいないからね！他のハンターさんは旅の途中寄って来た人とか療養してリハビリ目的でとかで、四人以外誰も集会浴場に来ない時があるというマイ設定です。
ガンナーでもバリバリ前線に出てきたり何だりとアクロバティックな射撃をする子ですが、狙いは常に良いという…。いじめっ子ではありますが弟妹の面倒をみてきたせいか年下の面倒をみるのが好き。自分の面倒もみて欲しいけどね！
何だかんだで良い子だから、咲はからかわれても信頼しちゃうのでしょう。

＊スウィーツ君
私がプレイし（ｒｙ
装備はチェダーと同じ虫装備。シルクハット被ってますが何か？
双剣ハンターで、好きな武器は狩団子。だってスウィーツだからね。
猫達の名前もスウィーツな感じ。チェダーさんはチーズ関係の名前とか付けてる。
ちなみにチェダーさんとの出会いはジンオウガに襲われてユクモ村に向かう道を転がり落ちた先で、精算アイテムの茸とかタケノコを焼いて食べようとしてるチェダーさんに介抱してもらった。

チェダーさんは一応年上で先輩なんだけど、色々酷過ぎて敬えない。でもちょっかいかけてくれるチェダーさんに懐いていて、何かとチェダーさん家に遊びに行ってる。村の人間からはさっさとくっつけよリア充とか思われてる。

＊二人共名字を名乗ってて、お互いはお互いの名前を知ってる。
咲君も知ってるけど、スウィーツ君が自分の名前が可愛過ぎて死ねる位名前を呼ばれるのが嫌なのを知ってるので呼ばない。チェダーさんはどうでもいい時に呼んだりする。最近はチェダーさんに呼ばれても恥ずかしがらなくなってきて、咲君にさっさとくっつけよリア（ｒｙ）と思われてる。

チェダーさんは何となく言わないだけ。聞かれたら多分名乗る感じ。ただ性格に合わない綺麗過ぎる名前なので咲君が呼びたくないだけ。周りはそんな咲君のせいでスウィーツ君と同じく自分の名前嫌いなのかなって思って名字呼びしてる。
咲君曰く、チェダーさんの親以上にチェダーさんはネーミングセンスが無い。

3．好物は林檎、林檎の兎なのです

たん、たん、たん、たたん、たたたたたっ

「――あ、咲お前、こんな所にいたのかよ」
「…どうした、アレがやっと出てきたのか？」
「いや、…なんだ、お前の姿が見えなかったもんだから、不安でずっと――え、ちょっと引くなよ！？」
「だってお前の噂が…」
「違うから、本当に違うから。アレは婚約者が…浮気防止用って…！」
「おい、泣くなよ」

たん、たん、たん、……

「……」
「なんだよ」
「…いやね、何ていうか…お前、雰囲気柔らかくなったよな」
「そうか？」
「さっきの昼飯の時にボケーと林檎を兎ちゃんにした時とかな。――ハンター成りたての頃にリオレウスとばったり遭遇した時の衝撃が走ったわ」
「あれはいつもの癖だったんだよ…恥ずかしくて死にそうだから暫く皆の所には行かねー」
「引き籠んなよ…」

たたた、たん、たと、たん……、

「つーかあの林檎、癖だって言ってたけどさ、何？お前ン家に子供（ガキ）でも居んの？」
「ああ…預かってるっていうか引き取ったっていうか」
「どっちだよ」
「村長が俺に頼んで来て…孤児（？）だったのを俺が拾ったのが始まりだったんだが」
「へー、女の子？男の子？」
「女」
「おー、いーねー、……手は出すなよ？」
「出さねーよ！」
「分かってるって、冗談だってぇ。…で、どんな感じ？美人になりそう？性格とかは？」
「……多分美人…？性格が…何て言うかな、野性児にならないだけ有難いんだろうが……世間知らずだな」
「お、おお？」
「どうしても肉が食いたくないみたいで、棒っきれみたいなんだよ」
「俺ペチャ…スレンダーな子もいけるよ！」
「死ね」
「ごめん…」

たん、たん、たん、

「――つーか、さっきから音がするけど、壊れてんじゃないだろ

うな…」
「大丈夫だろ」
「えー…何か聞いてて不安になるから出ようぜー？」
「俺は安心する」
「何で？」
「……あいつが跳ねてる音と、一緒だからな」

たん、たん、たん、
たん、たん、たん、たたた、

＊

「――――一年半、かぁ…」
「…？どうかしましたか？」
「いやさ、時間ってこう…早く過ぎていくものだなって」
「私は…昔は、長いものだと思っていました」
「そうか？」
「はい。特に――――待っているというのは…長いのです」
「待つって…咲は人を待たせない方だと思うんだけど…」

「ああ、兎だった頃のお話です。……一緒に遊んでくれる誰かを待ち続けた時は――――真っ白な雪の中は、一人で過ごすには寂しすぎます…」
「そう…だな」
「でも、誰かと過ごす雪の中はとても楽しかったです！それを飼い主さんが教えてくれました。今も時々長く感じるけれど、短くも感じるようになりましたよ」
「そうだな――――」
「きっと、誰かと騒いで、触れあう時間は、楽しいんだ……」
「――――でも、お爺さんは楽しくなさそうです」

此処は渓流、タケノコが生えている長閑な所。
スウィーツさんが採掘を止めて休んでいる隣で、私は採ったばかりのタケノコをポーチの中に詰め込んでいました。
私が声を潜めて呟いたのにスウィーツさんが呆れた視線を向けた先で、チェダーさんはお爺さんの服の胸元を掴んで怒鳴っていました。

「――――まさか、これだけって訳じゃあ無いでしょうねぇ、ああん？」
「いや、流石にこれ以上は……儂だって生活かかってんじゃあっ！」
「知るかぁぁ！！か弱い乙女にセクハラしといてタダで帰れると思うなよッさっさと出すモン出せや！」
「ちょっと尻を鷲掴んだだけだろうが！！」
「不快なんだよ、棺桶に頭突っ込んだような爺に触られて怒らない

女がいるわけねーだろ、ばぁぁかっ！」
「てめ、ハゲは言うなっつってんだろ！……あ、すいません、首締めないで。痛い、痛いよ、お爺ちゃん死んじゃうぅぅ…！」
「もういっそ殺してやろうか、モンスターの巣に放り込んでやろうか……！」

ギギギ、と口の端から涎を垂らしながら首をブンブン振るお爺さん。目が笑っていないチェダーさん。

んーと、確か陽がまだ真中に行く前の事でしょうか―――お爺さんがチェダーさんが猫を弄繰り回していた所を狙って綺麗な装備の下に潜り込んでやらかしたのです。あと
私の胸にも抱きついてきました―――…私としても不快だと思いますが、もうそこまでにしてあげればいいのではないかと思います…。

スウィーツさんの双剣でお爺さんの少ない頭髪を剃っただけで十分大ダメージだと思うのです、そのあとにローキックも入れてましたしね。

ですがチェダーさんはこの通り怒りが収まらないご様子で、普段の穏やかな声も言葉遣いも荒々しいのです。スウィーツさんは見ないふりをして採掘した物をポーチに入れていましたが。

「……おい、チェダーももういい加減にしとけ」
「はあ！？」
「に、兄ちゃん…懐が深い「死んだら隠蔽するのめんどくさいだろう」…えっ」

「確かチェダー、碧玉と逆鱗が無いって言ってたな――――…それ、出せよ」
「……えっ？」
「ああ、それいいねぇ……夜ちゃーん、爺さんの荷物を開けてくれるー？」
「あのっ、飼い主さんが他人の荷物は漁っちゃいけないって…」
「大丈夫大丈夫、爺さんの代わりに出すだけだから、漁るわけじゃないよー？」
「そう…ですか。了解しました」

そういえば私も飼い主さんの代わりに飼い主さんのポーチから道具を出していましたしね、お爺さんの代わりに渡すだけですもの。……ちぇ、チェダーさんが怖いから飼い主さんに言われた事に背くわけじゃないですよ！

「んん…っと、これは火打石で、強走薬……これは？」
「あっ！それ――――それは駄目ぇぇぶぶふっ！！」
「ちょっと黙っててよー…それは迅竜の骨髄だねぇ。夜ちゃん、それこっちに渡してくれるー？爺さんが詫びにくれるらしいから」
「ふがもももっ」
「あの、逆鱗しか…なくて…」
「もー、夜ちゃんったら泣きそうな顔してー…大丈夫、夜ちゃんは悪くないよ？」
「泣き、顔もそそるのう…いだだだだだっ！！」
「テメーは黙ってろよ、老いぼれがぁぁぁ！！」

下手な事をしたらこっちに怒りの火の粉が飛んできそうです…くす

んと鼻を鳴らす私の頭をぽんぽんと撫でて、スウィーツさんはお爺さんの荷物の奥の奥（…が、あったんですね…）に手を突っ込みました。

「あったぞ碧玉」
「流っ石スウィーツ！代わりに石ころでも入れてやんなっ」
「あ、ここにも……合わせて三つか――――時化（シケ）てんな」
「お…お前ら…それでもハンターか！？」
「ああん？ハントしてんだろーが」
「これはタカりじゃろうが！！」
「……いいか、夜。やられたらやり返す、またやらかそうなんて考えないくらいに絞り盗るのがハンターだ。太く逞しく生きるんだぞ」
「は、い…？」

肩に手を置き、いつもと変わらぬ顔のスウィーツさん。……私の中のスウィーツさんがどんどん変わっていきます…。

それでもやり過ぎじゃないかとチラチラ見ていたら、「夜もセクハラの被害に遭ったんだ、気にする事は無いし許すな」と。きっと咲もそう言うだろうと言われて、やっとこくりと頷きました。

「――――そらっ、とっとと失せな！」
「このッ……盗人が！極悪犯罪者が！！」

ぺいっと放した…いや、投げたチェダーさんにそう吐き捨てて、お爺さんはスウィーツさんが投げ渡した荷物を抱えて転ぶように逃げ

去りました。
小さくなる背を鼻で笑ったチェダーさんはくるりと振り向くと、溜息を吐いてスウィーツさんの隣に腰掛けました。

「まったく。いい歳こいて色惚けとか勘弁して欲しいよ」
「人恋しかったのでしょうかねぇ」
「…夜ちゃんはもっと警戒心持たないとね。恋人でもない異性に胸を触られるなんて重罪だから。極刑だから」
「え―――でも、チェダーさんはスウィーツさんの胸…」
「あ、あああああれは…！こいつが痴女だから…！！」
「私はスウィーツ限定の痴女だから。…何かスウィーツの顔見ると胸揉みたくなるんだよね…」
「女顔って言いたいのか！？」

怒鳴るスウィーツさんの唇に強走薬の瓶を当てて、「私、君の綺麗な顔が大好きだよ」と悪戯っ子のような笑みを浮かべました。
それにそっぽ向くスウィーツさんにこっそり笑ったチェダーさん。何故か迅竜の骨髄を私に持たせるのに、こてんと首を傾げました。

「夜ちゃんも被害者だからね。私が逆鱗と碧玉三つ、夜ちゃんに骨髄と火打石、一緒にとっちめてくれたスウィーツには強走薬…と私から、蜂蜜」
「あ、じゃあ私は…ペイントボールと投げナイフを」
「ちょｗｗペイントｗｗボールｗｗ」
「……ちょうどペイントボール無かったから、有難いよ…！」

「スウィーツが叩いたー！」
「うっせー！蜂蜜投げられないだけ有難いと思え！」
「――――あ、蜂さんが…」
「……え？ちょ、蜂蜜の中に蜂が5，6匹沈んでる！？」
「栄養たっぷりで良かったじゃん」
「良くねーよ！お前俺が虫嫌いなの知ってて――――…あ？何だ、あれ？」

蜂蜜をしっかり握ったまま、スウィーツさんは向こうへと指をさしました。

見れば何とも無いのですが、……一分経った頃でしょうか、何かが光っています。

「ジンオウガかねぇ」
「…どうするよ」
「下級ですが――――…その、私…武器が…」
「上級ハンター二名とはいえ、ジンオウガ向きの武器じゃないし…てかアオアシラしか出ない筈なんだけど」
「狩り場が不安定だとも言われてないしな…。ここは一旦引くか？狩ることもないだろう」
「村に来なければ別に良いんだけどねぇ」
「報告だけしておくのはどうでしょうか？」
「そうしようか。じゃ、今日は帰りましょっと」

――――そうして、私達三人は仲良く家路についたのです。

報告を終え、付き合ってくれた事の礼を言い――――それから、私は家の掃除をしてくれた猫達をもふもふして、飼い主さんが干して行ったのだろう洗濯物を取り込んで畳み終わった後、びくびくしながらじゃが芋のスープを作っていました。

スープなら後で温めるだけですし、他の料理は飼い主さんが来てから猫達が作ってくれるそう。私はコトコトと煮込む鍋を背に、ゆっくりゆっくり林檎を剥いていました。

――――この一年半で、私はこれだけの家事が出来るようになったのです！

今でも（兎時代の名残か）火が怖いのですが、料理に使う火ぐらいならば手を出せます。これも飼い主さんが狩りに行ってる最中、キャンプの火の面倒を見続けた成果ですね。

包丁は見よう見まね、猫達の指導に基づいてなのですが――――飼い主さんのような林檎の兎にならないのです。さっきの子なんて耳が半分折れてしまいましたし。

「…、……痛っ」

……しかも、手までざっくり……飼い主さん、早く帰って来ない

かな……。

慌ててすっ飛んできてくれた猫さんに薬を塗ってもらいながら、変な兎を齧っては、ちらちらと扉に目をやります。

――――今はまだ夕暮れ。飼い主さんが帰って来るまでには時間がたっぷりあります。

だけど……もしかしたら、早く帰って来てくるんじゃないかって、期待してしまう。

そんな私の視線の先、急にノックの音が！

私は包帯を持った猫を背に、急いで扉に駆け寄りました――――、

「あの、スウィーツなんだけど」

「チェダーさんもいるよー！」

……思わず、（，；ω；、）な顔で扉を開けてしまい、お二人に心配されました……。

「ありゃりゃ、夜ちゃんざっくりやったねー？」

「林檎を剥いていたら……情けないです」

「いや、ここまで剥けたんなら大したもんだ……で、これよかったら、お裾分け」

「わっ申し訳ないです！」
「いーのいーの。スウィーツは多く作っちゃう子だからね。それに今日は咲ちゃんも遅いし……夕飯食べた？」
「はい、林檎を」
「……林檎を？」
「林檎を」

好物なのです、と言えば、お二人共すごく渋い顔をして見つめ合ってます。本当に仲の良い二人ですよね…。……飼い主さん（，；ω；、）

「あの……俺、何か作ろうか？」
「いえいえ、大丈夫です、飼い主さんが作った残りもありますし…」
「ああ、それ？鍋が二つあるの」
「ええ、右のがさっき私が作った…」
「「作った！？」」
「はい…じゃが芋のミルクスープ…」
「……え、どうしよう。私この子より年上なのに…作れない」
「お前は作ると毒薬しか作れねーもんな」
「目玉焼きは作れるよ！」

ああ、そうかよと冷たく言うスウィーツさん。飼い主さんに似てないのに似てるように思えてきました。

そうするとだんだん、なんだか悲しくて、小さく「くすん」と鼻を鳴らしてしまいました。
少し俯いていると、チェダーさんの「じゃじゃじゃじゃーん！」と

いう声と共に綺麗に布に包まれていた箱が開いて、スウィーツさんが作ってくれたお裾分けを見せてくれました。

「綺麗なお菓子…！」
「あ、ああ、得意だからな…」
「夜ちゃん、この菓子は他のと違って異様に甘いから、食べる時は咲ちゃんにやるんだよ」
「おま…何言って…何で分かんの！？」
「摘まみ食いしたから」
「だから一個足りなかったのか…って無断で食うな！」
「ちゃんと『ごっつぁん』って言ったじゃん」
「ごっつぁん…？」
「ああ、『御馳走様』ってこと」
「夜は絶対使うなよ、使った日には俺らにとばっちりが来る……ってテーブルに座るなっ行儀の悪い…！」

そう言ってチェダーさんの為にスウィーツさんが椅子を引いてあげると、またも扉が――――今度は激しく――――叩かれました。

「ハンターさんっハンターさん！大変、ジンオウガが――――――！！」

思わず固まった私とスウィーツさんに背を向けて、チェダーさんが素早く扉に手をかけました。

＊

「おっしゃー！獲ったどー！！」
「うっせぇ。叫ぶな」
「えー、だって折角の勝利の余韻が……え、何処行くの？」
「暑いから帰る。用もないし」
「え、ちょ、待って、俺を一人にしないでぇぇぇ！！」

「――――ふぅ、やっと帰れるな…」
「なあなあ、咲はこっちに泊まんねーの？今から帰るとか疲れんだろ」
「別に。今回はジャックが出張ってきてくれたから負担もそんなに無かったしな」
「……なあなあ、俺と一緒に褐色の美女と…」
「婚約者はどうした」
「ちげーって！此処にな、褐色の美人歌姫が居るんだってー！俺の婚約者はキャワイイけど、偶には違う女の子も見たいのが男だろー？手を出すのは流石にアカンけど、見る分には別に良いじゃん！」
「お前……だから婚約者にホモの噂流されるんだよ……」
「あいつも分かってねーな。俺はシェリー一筋なのにさー？俺は本命以外は見ておくだけにしときたい派なの！」
「いや、お前はヘタレなだけだろ」

「ちーがーいーまーすー……って、咲、お前またそっち行くの？」
「……他の奴と会いたくないんだよ」
「もう誰も兎ちゃん事件の事は言わないってぇー！一部のハンターからは『意外過ぎて可愛い！』とか言われてんだぞ、お前」
「……？女のハンターなんか乗ってたか？」
「あ、いいや、『そっちの』ハンターさんが……」
「俺絶対この部屋から出ない。…じゃあな。お前も噂が本当にならないように気をつけろよ」
「え、ちょ、ちょ！待って、俺も！俺もご一緒させて下さいぃぃぃ！！」

＊

寂しいのはお互い様なハンターさん×ずっと飼い主さんしか考えてない兎ちゃん×セクハラだけは許せない（ここだけピュアな）ハンターさん×セクハラに怒ったけど彼女のキレ方に引いたハンターさん

3．好物は林檎、林檎の兎なのです（後書き）

オマケ

チェダーさんは上級ハンターだけど貧血になりやすくて砂漠にはいけない設定。凍土も同じく苦手だけどなんとか大丈夫。
料理できないのは猫任せ、後輩（スウィーツ）が色々持って来てくれるから。ていうか本人がやる気出して調理しようとすると誰かが止める。普段料理しろって言うくせに何故か止める。

スウィーツと咲の違いはスウィーツはツンとしてても照れたり笑ったりするけど、咲はなんか寡黙。溜息と眉間にしわを寄せるのがデフォ。でも内心可愛くてふわふわしたものが好き。

年齢は特に決めてないけど、チェダーさんは咲と同い年か一二個下。スウィーツはチェダーさんとは三歳下。兎さんはこの中で一番若い。

4．保護者は飼い主さんですよ！

「ジンオウガが、村に迫ってきていると！」

「すでに村人が何人か……」

「ジンオウガ以外にも…」

――

――――

――――――

がたたたたたっ

慌ただしく坂を下るネコタクの上で、私達三人は持ち物の確認などをしていました。

――ちなみに私達以外のハンターで上級はチェダーさんとスウィーツさんのお二人ともう一人、療養に来られた人だけ。
下級は私と二人（旅の途中、この村に寄って来たらしいです）いるのですが、二人共ジンオウガは相手に出来ないと断られ、結局三人で討伐クエストを受けました。

スウィーツさんは最後まで反対していたのですが、私が飼い主さんに留守を頼まれているから果たしたいのだと頭を下げたら、渋々了承してくれました。

チェダーさんとはジンオウガ以外の相手の目を引きつけてくれればいいから、絶対にジンオウガに手を出さないこととときつく、何度も約束しました。

「罠持ったし…よし、」
「巻き込まれないように頑張ってね、二人共」
「はいっ」
「夜ちゃんは向こうに着いたらずっと耳を澄ませておくんだよ、駄目だと思ったら逃げること」
「はいっ」
「あまり緊張すんな。過度の緊張も危険だぞ」
「はい…」
「夜ちゃんはずっと咲ちゃんと一緒に狩ってたもんねぇ。しょうがないか」

でも、チェダーさんは咲ちゃんより強いから、心配ご無用さ！――と頭を撫でてくれるチェダーさんと、その隣で頬杖をついて口元を緩めるスウィーツさんに「はい」とだけ言って何とか笑ってみせました。

「着いたニャー！」

「あいよっと。…二人共準備運動してから行くー？」
「いらねーよ」
「大丈夫です」
「うっし、じゃあ行くぞー」

弓の練習をしに行く時のような調子で、チェダーさんはライトボウガンを確認した後、私達の先頭をきって歩き出しました。

（……耳が痛いくらい静かです…）

辺りは夜という事を踏まえても異常に静かで、私は自分の足音やお二人の装備と武器がぶつかって鳴る小さな音に怯えてしまいます……。

思わず立ち止りそうになった時――――――バチリ、という音が遠くから、確かに聞こえました。

「――――チェダーさん！向こうのエリアです！」
「おお？早いねぇ」
「バチバチいってます」
「……行くのが嫌になるな…」

私の言葉に駆け出すお二人の背中を慌てて追いかけながら、私は唇を強く噛みました。

怖がらないで――――飼い主さんに頼まれたでしょう。留守を守らなきゃ。

大丈夫、飼い主さんだって、私にハンマーを持たせたら下級クエストにお前の敵はいないって頭を撫でてくれたもの。私はお二人に向かってくるモンスターを叩けばいいだけ。大丈夫、大丈夫……。

「いたよ！スウィーツ！」
「よっ……と」
「ちょ――――本当に下手くそだね、スウィーツ君は」
「うっせ――！」
「まあいいけどね、一応当たったみたいだし」

よっこらしょ、とチェダーさんはボウガンを引っ張り出すと、パン、とジンオウガの頭に打ち込みます。
同時にジンオウガが身じろいだ為に掠った程度のダメージにはなってしまいましたが、ジンオウガが私とチェダーさんに襲いかかろうとする事で時間を稼ぐことが出来ました。
放電の後、ぐ、と身体を後ろに引いたジンオウガの足下に辿り着いたスウィーツさんは、思いっきり双剣で大きな足を切りつけます。
当然足の痛みの方に顔を向けるジンオウガでしたが、チェダーさんに撃たれて慌ててこちらに向くと、足下のスウィーツさんを無視して飛びかかってきました。

「……っ、と」
「ナイス夜ちゃん！」
それを私のハンマーで殴り付ける事で防ぐと、チェダーさんの撃った弾が爆発。私の氷のハンマーが煌めきながら、今度は仰け反ったジンオウガの頬を殴り付けました。

もう一撃――――そう意気込んだ時、こちらに近づく大猪の音に気が付き、慌ててハンマーで背後から迫る猪を殴りました。
チェダーさんは私を一瞥するも迷ったようで、ジンオウガの電流が放たれるまでその場を動かず、何発か撃っては援護してくれました。
「夜ちゃん避けて！」
私とチェダーさんが両端に逃げて放電をかわすと、私はそのまま猪を殴りつけながら別のエリアに移動します。
「無茶しないで、危険なら逃げるんだよ――――！」
「はいっチェダーさんもお気をつけて…！」
お互い早口にそれだけ叫ぶと、やがて襲いかかるモンスターだけに集中しました。

（――――…どうしよう。まさかドスファンゴだなんて…相性悪い…）

アオアシラとジンオウガと相性の良い氷属性。でも猪には相性が悪い。……もうちょっと考えておけばよかったのでしょうか。

……まあでも、お二人がジンオウガを倒すまで持ちこたえればいいだけですから、別にこの子を倒さなくてもいい。……の、ですが――――この子とは、兎時代からの因縁があるのです。

私が丸まって寝ていれば突進。私が誰かとじゃれ合っていれば割って入って邪魔をする。食べ物（植物）も荒らされましたし……ああ、何度泣き寝入りしたことでしょう。

この子もさっきのジンオウガも、かなり大きかったですが（記録更新間違い無しですね）絶対に負けられません。討てないにしろ、その牙だけでもパッキリポッキリ折ってやるのです！

「やぁ――――――！」

声と共にハンマーで横腹に一発お見舞い。

僅かに揺れましたが、何だか堪えてなさそう。もう一度横腹に殴りつけ、思いっきり振り下ろしてみて、やっと退いてくれました。

ぶるぶると鼻を鳴らす猪の機嫌がかなり良くないのを察知してハンマーを仕舞うと、急いで距離を開けようと駆け出します――――あっ。

（嘘、アオアシラ――――）

思わず足を止めてしまった私は、迫るドスファンゴの突進をモロに受けてしまいました……。

＊

「そいやー！」
「キャー、スウィーツ君カッコイイー！」
「棒読みで褒められても嬉しくねーんだよ！」
「ぶー」
「ぶーじゃな…おま、薬草噛みながら撃ってんなよ…」
「や、だって生えてたから…なんかもったいないかなって」
「食う方がもったいなくね？」
「そう――あ、スウィーツ左に避けて」
「あん？……うわわッ」
「よそ見してんなよー。だから蜂蜜だらけになるし、ペイントボールも急カーブするんだぞー」
「うっせーよ！」

「――なんかあと少しって感じ。…夜ちゃん大丈夫かな…」

「今回は狩り場が不安定すぎるからな…」
「さっきのドスファンゴとかね……あと少しだし、スウィーツ助けに行ってあげてよ」
「え、でもお前は…」
「大丈夫大丈夫。後は爆殺するだけだし。一応罠ちょうだーい」
「……（…大丈夫かな）」
「夜ちゃんの事、よろしくね」

＊

――――此処は、何処なのでしょう…。

最後はがむしゃらに逃げて、殴って、猪の牙をぱっきり折ってやって。そしたら宙に投げ出されて。転がり落ちて……ああ、思い出した。確かエリア7の端の端、背丈の高い草に隠された――――大人が一人丸まれる程度のくぼみ（もしくは洞穴？）に入ってしまったのでした。

運良く見つからなかったのでしょうか…。

（あ……装備、所々破れてる…）

――私の兎だった頃の毛皮で出来た装備。真っ黒で、ふわふわしてて。飼い主さんの隣にいる時のように、着ていて落ち着く、私の毛皮。

見ればいたる所が土で汚れて、腕とスカートが裂けてて、足はまるまる一本じくじくと痛くて。頬も擦り切れたのか、時折頬を撫でる風が滲みてきます。

（お二人は無事でしょうか…私が相手をしてられなくなったモンスターのせいで、大変な目に遭ってないでしょうか…）

そう思うととても不安なのに、私は震えるだけで身体が動きません。起きようとしては崩れ落ちてしまうのです。

ああもう――――本当にごめんなさい。あんなに連れてってくれと、役に立つからと強請ったのに、もう痛くて歩けないんです。寂しくて心が折れそうなのです。

だって、こんな目に遭ったの、初めてなんです……。

兎の頃は一人ぼっちで、「夜」になってからは飼い主さんがいつも近くにいて、庇ってくれてたから。知らなかったんです……。

負けたことなんて、無かったんです……。

（――――留守、頼まれたのに。お二人に押し付けてしまった……）

飼い主さんは役立たずって言うでしょうか。お二人にはお荷物と思われたでしょうか。…私は、どうやって帰れるんでしょうか……。

ぽつ、ぽつ……ぱたたたたた

（雨、降ってきちゃった……）

手の甲に、頬に当たる雨――――見ててとても寂しくて、寒い。

（…帰りたいです…お家に帰って、火に当たって、飼い主さんの膝に飛び込んで、叱る声も気にせずに、そのまま頬ずりをして。今日の事をいっぱい話したい…）

――――飼い主さんに褒めて欲しくて、じゃが芋のミルクスープ、頑張って作ったんです。

弓はやっぱり駄目だったけど、練習したらもしかしたらって、チェダーさんが。ああ、あと、スウィーツさんがお菓子をくださったんですよ。一緒に食べましょう？

…飼い主さんの方はどうでしたか？砂漠って暑いのでしょう、辛くはなかったですか？船はどんな――――？

（きっと飼い主さんは何から話せばいいのか迷って、眉を寄せるのです。そして一つ一つ、ゆっくり話してくれる。…ああでも、その前にご飯だって言うのかな）

目が熱い。何かが目からとろりと落ちていくのが分かります。――――負けなかったら、こんな思いしなくて良かった（この時になって、初めて私は『悔しい』という感情を知りました）のに。勝ってたら、早く家に帰って、飼い主さんを出迎えれて、留守を守れた事を褒めてもらえたのに…！

（呆れるかな。駄目な子って思われるかな。穀潰しって言われるかな…）

――――私、朝のネコタクに乗りながらずっとずっと思ってたのです。今度は嫌な顔しないで、朝作ってくれた肉を葉っぱで包んだスープを一緒に食べたかったとか、「美味しかったです」って言いたかったとか。

もう、そんなの、無理なのでしょうか。また一人っきりなのかな……。

――――遠くで、大猪特有の足音がする。草を掻き分ける音がする。もう駄目だ。次はきっと見つかる。見つかったら……どうなるのでしょう。

「……あいたい、よぅ……」

かいぬし、さん。

「…く…、…ろっ……くろ、…黒――――！何処だ――――！！」

「ぁ…？」

雨の音、斬り付ける音。悲鳴なのかよく分からない声。飼い主さんの、声……！

続いて聞こえる、どぉん、と倒れる音に思わず身体を震わせて、私はもう一度腕に力を入れます。そろそろと身体を支えている腕とは反対の手で、草を掻き分けました。

「そこかっ！？」

草が触れあってガサガサと鳴るのに気付いて、飼い主さんはビチャンとかパシャパシャと音を鳴らして私の名前をずっと呼んでいて――――。

「――――ぃ…し、さん。…かいぬしさん。飼い主さぁん！」

飼い主さんの腕が遠くに見えた瞬間、私は駆け寄ろうとして足の痛みによろめいて、ばしゃんと水溜りの中に埋もれてしまいました。

身体を起こして頭を振ると、ガサガサと鳴る草の音は止んでいて、息を飲む音の後に、飼い主さんの大きな腕が身体を抱き起こしてくれました。

「飼い主さん――――」
「黒ッお前…留守を守ってろって言っただろうが！」
「……ごめんなさい。お役に立てなくて…」

言われるだろうなと分かっていても、実際言われるととても申し訳なくて。私は思わず零れそうになる涙を堪えようとして震えてしまいます。

すると飼い主さんが慌てていつもの通り大きな手で涙をぬぐい取ろうとして、……戻してしまいました。

それが寂しくて、どうしてだろうと飼い主さんの腕を見れば――――血と、葉っぱで薄く切れた傷だらけでした。

「……どうして家にいなかった？」
「…飼い主さんに、留守を頼むって、言われたから……」
「……あ？」
「……留守……」
「……？」
「……（、；ω；、）」
「――――……あの、アレか？もしかしてお前にとっての留守って、俺の代わりをすることか？」

「……飼い主さんがそう教えてくれました…」

――――あれはこの村に来て二月位経った頃でしょうか。
急なクエストに出ていく事になった飼い主さんに、初めて留守番を頼まれたのです。

『――――飼い主さん』
『あ？』
『留守って、何ですか…？』
『留守はー…アレだ、俺がやる事をしたりするんだ。洗濯とか掃除とか…あ、今日はもう終わったからしなくていいぞ。外に出ないで、家でじっと待ってろ。…な？』
『待つ……』
『……？』
『（，；ω；，、）』
『泣くなよ…』

――――という風な説明を受けたのですが。
留守＝「飼い主さんがすること」で、飼い主さんは今回みたいな緊急クエストも参加していたから、参加したのですが……。
「違うのですか？」と首を傾げたら、飼い主さんは急におでこに手を当てて俯いてしまいました。
「……なんでよりにもよって後半部分を無視するんだ」

「？」
「しょうがない、そこら辺は後で教え直そう――――…どうした？」
「あのっ、あの…」

私の装備の切れ具合や傷に目を向けていた飼い主さんの手を握って、私は――――顔を見れなくて、ずっと飼い主さんの手を見つめていました。

「私――――に、呆れましたか？役立たず…ですよね…」

不安のあまり思わず口から飛び出た言葉。飛び出したら余計に不安が増して――――もしこの手が振り払われたら。「ああ」と溜息交じりに言われたら、私はどうすればいいのでしょう……？

「ばぁーか」

飼い主さんは俯く私のおでこを、ペチンと弾きました。……地味に痛いのです。

「…俺が何度お前に呆れたと思ってんだ。朝は布団から出ようとしない、ひっついて離れない、肉は食わない、菓子食う時はいつも口にカスが付いてるし、チェダーのあんちくしょうの言う事は鵜呑みにするし、拗ねると何をやらかすか分かったもんじゃないトラブルメーカーだし。……だけど、そんなお前に呆れはしても役立たずと

思った事はねーよ」
「ほ、本当ですか…！」
「ああ」
「駄目な子とか、怠け者とか、穀潰しとか、金食い虫とか…！」
「……おい。誰からそんな言葉を教えてもらった」
「隣のおば様が言っていたのを聞きました」
「――――〜〜ッ」

意味は分からないですけど、とりあえず罵り文句というか、不名誉な言葉なのだと思っています。

「……思って、ませんか…？」
「…思ってねーよ」
「本当に？」
「本当に」
「私の事、何処かに捨てたりとか…」
「しねーよ」
「じゃ、じゃあ、ずっと傍にいてくれますよね…！？」
「……」
「…飼い主さん…（，；ω；　、）」
「…いや、だってお前、これは何というか、返事のしようが…」
「（，；ω；　、）」
「…だあぁぁぁぁ！！分かったよ！傍にいるさ、お前が出てくまではな！」
「やったぁ！」

その言葉だけで、空はまだ雨が降っているのに何故か晴れているよ

うな気分になれます。
私はそっぽ向いてる飼い主さんに気持ちのままに抱きつくと、胸に頬を擦り寄せて叫びました。

「飼い主さん、大好きです！」

———あの雪の中、初めて何日も私に会いに、遊びに来てくれた人。私を拾ってくれた人。

あの日から私は飼い主さんが大好きなのです。わしゃわしゃしてくれる大きな手が大好きなのです。私を受け入れてくれる懐の広さが大好きです———。

「……あ、ああ。そうか」
「飼い主さんはー？」
「あー……嫌いじゃない、ぞ」
「（、・ω・、）」
「……まあ、好き、かな」

わしゃり、と髪を撫でてくれる飼い主さん。何だか嬉しくて、思わず眉を寄せた飼い主さんに笑いかけたら、ちょっとの沈黙の後、コホンと咳を出しました。

「風邪ですか…？」
「ちげーよ。これは———…いや、どうでもいい。ほら、傷の具合

は？」

足とほっぺたが痛いです。あと全身痛いです。…と答えたら、飼い主さんがおぶ――――ろうとして、太刀が邪魔で無理でしたので、抱き抱えて貰いました。

あ、ちなみに私の武器のハンマーは猪の身体に丁度良く挟まっていたらしく、猫達が回収してくれたとの事です。

「あっお二人が――――」

「行ったらチェダーが仕留めてたぞ。スウィーツは…蜂蜜まみれだったが」

「朝からずっとですね…蜂蜜に縁があるんでしょうか…」

「いや、呪われてんだろ、あれは」

あれは近くから見ても化け物だった。思わず太刀を抜く所だったんだ、と遠い目をする飼い主さん。

やっといつもの日常に戻れたような、お家に帰って来たような安心感に包まれた私は、ふと飼い主さんの腕の中で香る、血の香り――――の中に汗の香りが混じっていることに気付きました。

しかもよく見れば最初のクエストとなんら変わっていない（今回のクエスト向けじゃない）装備です。……急いで、探しに来てくれたのでしょうか。

「……あのですね、夕飯にじゃが芋のミルクスープを作ったのです」

「ああ、じゃあお前のこの手の怪我はそれか」
「違います。これは林檎を剥くのに失敗して出来ました」
「何で威張ってんだ」

（――――まるで、魔法のよう）

雨はまだやまず、ぽつぽつと頬に当たっていましたけれど、もう寂しいとは思わなくなりまして。
むしろ、静かに落ちるそれが、とても綺麗な宝石に見えて。

「……やっぱり、飼い主さんじゃないと、綺麗な兎さんは出来ませんでした」
「…そっか」
「帰ったら、作ってくれますか？」
「ああ。…帰ったら、その林檎のせいで起きた嫌な話を教えてやる」
「嫌な話……？」
「癖は恐ろしいって事だ。…いや、本当に癖って怖いな」
「お船の事も聞きたいのです――――あ、それから飼い主さんにお見せしたい物があるのですよ。スウィーツさんからお菓子を頂きましたから、一緒に食べて、聞きたいです」

飼い主さんがぶっきらぼうな声で「そうか」とだけ言うのが、とても優しく聞こえるだなんて。……飼い主さんはまるで、魔法使いみたいです。

＊

超特急で探しに来た保護者ハンター、兎ちゃんに一瞬惚れかける、の巻。

4．保護者は飼い主さんですよ！（後書き）

オマケ（備考）

今回のクエストに出てくるモンスターは実は下位レベルじゃなくて上位のモンスター。調査が不十分な状態でのクエストだったせいで夜ちゃんはエライ目に遭いました。
でも馬鹿力なので頑張って一人でドスファンゴの牙をパキッと折れる位には実力があるし、咲ちゃんがいればもうちょっと善戦します。

ちなみに夜ちゃん兎時代の名残の毛皮はかなり上等です。夜ちゃん討伐のクエストは実は上位クエストだったのです。…で、その毛皮を防具にしてるので、攻撃力はまだまだ下級ハンターなのでアレですが防御力は上級レベル。……見事に破けちゃったけどね！

＊オマケのおまけ。咲ちゃんが迎えに行くまで←

急ぎ足でお家に帰る⇒家に誰もいない⇒猫と村長から話を聞く⇒何か色々言われたけど無視してネコタク超特急コース⇒上級装備で遠慮なく出会うモンスターを血祭り（※狩り）に⇒まっくろくろすけでておいでー！…という流れ。

夜ちゃんはまだ精神的に幼くて、家族愛と恋愛の違いが分かってない感じです。咲ちゃんもそれは分かってるんだけど、肉体年齢とのギャップにくらっときちゃう事が偶にあります。

今回は夜ちゃんが出ていくまでとは言ったものの、多分彼はあの手この手で夜ちゃんの自立を邪魔するだろうなぁ――――とこっそり覗いていたチェダーさんは思っちゃう訳です。

……ちなみにチェダーさんはキャンプに着くまで見つからないようにこっそり覗きながらニヤニヤします。そして色んな所が泥だらけ草っぱだらけの咲ちゃんを帰り道にからかう予定です。

5．甘えん坊な性格です

もぞもぞお布団から顔を出してこんにちは、飼い主さん。

もうお昼なのです。起きて欲しいのです。スープを温めたんですよ……猫ちゃんが。

ねえねえ、飼い主さん、飼い主さん。

「――――ん、……お、おおお、お前っ何で俺の布団に潜り込んでるの！？」

「昨日、飼い主さんに一緒に寝たいって言ったら『ふぁん？』て答えてくれたので、いいのかなって」

「おいっそれは返事じゃな――――…駄目だ、眠い……」

「ご飯ですよー！」

「抱きつくなっ」

そう言って私をベッドから落とそうとして、昨日の打ち身と足の傷（お薬のおかげで打ち身はだいぶ良いですよ）の事を思い出してくれたのかすぐにやめると、渋々上半身を起こします。

顔を覆うように両の手を当てると、「眠い…」とだけ呟きました。

「飼い主さん、ご飯食べたらゴロゴロしてたくさん喋りましょうよ。今日は猫達が家事をしてくれるそうなのですよー」

「あー？…ああ、そういえば昨日そう約束したな…」
「じゃが芋のミルクスープ、食べて下さいよー」
「ああ、それも約束したな…」
「林檎の兎…」
「約束、したな…ふぁ…」

あと十五分待ってろ。と枕に顔を埋めようとする飼い主さんに貼り付いて、私は布団の中で足を（無事な方をですが）パタパタしました。

「十五分って、どれぐらいですかー？」
「…六十を、十五回」
「六十？」
「……十を六回。それを十五回繰り返せ」
「えっと、十を六…うー、やだやだ、飼い主さん起きて下さいな。兎は寂しいのが嫌なのです。昨日はとても寂しかったんですから、構って下さいな」
「俺は昨日疲れて帰って……あれ、何か肩に柔らかい———？」
「む？」

眠たげな顔で肩を見遣る飼い主さん。その肩の上には私が乗っています。

「く、」
「く？」
「黒ぉぉぉ！！お前ッなんて破廉恥な格好してんだぁぁぁ！！」

何故か怒られた格好ですが――――飼い主さんの物なのでぶかぶかな白い木綿のシャツ一枚を着ているだけです。（普段は駄目って言われています）

でも昨日、あちこち怪我だらけだからって渋々了承して……あ、さっき布団の中でもごもご動いてたから、ボタンが二つ開いてます。なんか寒いなーって思ってたのですよ。

「破廉恥ってなんですか？」

「そこから！？そこから教えなくちゃいけないのか！？ていうかお前、下着はどうした！？」

知らない単語を尋ねたら何故か下着の有無に。だけどその前に胸元が寒いので飼い主さんにもっとくっつきたいのです――――……思わず「ぎゅっ」てしたら叩かれました（´・ω・、）

「……穿いてますよ？」

「下じゃない！上だ上！む、…胸は！？」

「――――ちぇ、チェダーさんが、夜には付けない方がいいって。きっと飼い主さんもその方がよろk」

「喜ばねーよ！！…あんのチーズ野郎、今度会ったら――――会った、ら…」

私の返答にガバッと起き上がって（私は跳ね飛ばされる形で起きま

した）の会話だったのですが、飼い主さんは不意に視線を下に、私の左足に置かれた、飼い主さんの手に向けます。
す、と震えた指先が私の太腿を撫でて、「くすぐったいです」とふにゃりと笑っていいますと、飼い主さんはそのまま黙って布団を被って丸くなりました。

「か、飼い主さん…？」
「昨日の今日でこれは無いだろぉぉ！？」
「あの、飼い主さん」
「くっそ、これがわざとだったのなら…！何で無自覚なんだよッいい歳した娘が足を出すんじゃねーよッ」
「か、飼い主さん…」
「何で洗剤も洗髪剤も住んでる所も一緒なのにお前だけいやに良い匂いすんだよッなんで甘い匂いするんだよッ肉もっと食えよ馬鹿！」
「（，；ω；、）」

＊

結局その十五分後？に飼い主さんは部屋から出てました。
私は拗ねて飼い主さんの足下で寝ていたのを横に担がれ、（その前

にきっちりボタンを閉められました）二人で「遅いニャー！」と怒られて肉球に頬を打たれてから席に着いたのです。

「……うん、ちゃんとよく煮込まれてるな」
「――じゃ、じゃあ、美味しいですか…？ねえねえ、美味しいですか！？」
「ああ」
「えへへー」

飼い主さんは相変わらず食事しか見ていないけれど、撫でてくれなくてもその言葉だけでとても嬉しいのです。

私は意を決して葉に包まれた肉をもきゅもきゅ食べて、吃驚した飼い主さんに「美味しいです」と言いました。

「……そっか」
「はい。…私もミルクスープ飲みたいです」
「ああ、ほら」

ずいっと息を吹きかけて冷ましたスープを私の口元に出されたので、温くなったスープをスプーンごと口に入れました。

「……あ」
「？」
「…いや、何でもない。……どうだ？」
「美味しいです」

そうだな、と飼い主さんが白パンを千切って頬張るのをニコニコ見ていたら、飼い主さんにパンを突っ込まれました…。

「……昨日はどうだった」
「チェダーさんに、もう少し練習してみようって。それからスウィーツさんのペイントボールって急カーブの出来る機能付きなんですよ！蜂蜜だらけになってましたし」
「あいつ本当に上級ハンターかよ…」
「お二人と一緒に弓でアオアシラを倒したのです」
「よかったな」
「それで――――…あ、そうだ！」

――――いけないいけない。飼い主さんに見せようと思ってたのに、すっかり忘れていました。

私はパタパタと収納ボックスの中を探ると、両腕に抱えて飼い主さんの元に戻りました。

「――――…迅竜の骨髄…？お前、それをどうした？」
「お爺さんから頂きました」
「行ったのは渓流だろう？」
「御兄弟から譲ってもらったらしいですよ」
「…それをどうしてお前が貰うんだ」

ええっとですね、三人でタケノコを採っていたら、お爺さんがチェ

ダーさんのお尻に触って、私の胸を掴んできて、スウィーツさんの双剣で髪の毛剃られて、チェダーさんがすごく怒ってて、蹴って踏んで胸元を掴んで。
チェダーさんが「詫びに荷物の中身をくれる」って言うから、……だって怖かったのです、私だって駄目じゃないかって言いましたよ――――チェダーさんの欲しがってた碧玉と逆鱗、私に骨髄と火打石、スウィーツさんに強走薬。…と、チェダーさんから蜂蜜。私からペイントボールと投げナイフをあげたのです。

「……あのジジイ…！」

てっきりチェダーさんを怒ると思ったらお爺さんの方に怒りを感じたようです。

「今度会ったらモンスターの巣に放り込んでやる…！」
「あ、それチェダーさんもおっしゃってました」
「……崖から落とすか」
「もういいじゃないですか、過ぎたことですし」
「――――そもそもお前な、胸揉まれたのになんでそんな平気そうな顔してんだ！チェダーの反応が普通だろ？怖いとか気持ち悪いとかあんだろ！？」
「気持ち悪かったですけど…なんか見てて可哀想になって…」
「甘い！今度やられたら腹に蹴りの一発でも入れろ！」
「でも……」
「お前は他人に甘すぎんだよ！」

怒りながらも私の分もお茶を淹れてくれる飼い主さん。お揃いのカ

ップを見ながら、私はパンを両の手で弄りました。

「……だって、昔、言われたのです」
「あん？」
「『人間は脆いから、何があっても、もきゅもきゅしちゃ駄目』って」
「もきゅもきゅ…？」
「飼い主さんと初めて会った時に遊んだ事です」
「おま……アレは『もきゅもきゅ』なんて可愛い擬音を使っていいレベルじゃなかったぞ…！？」

飛びついて、ぐるぐるして、兎パンチ。積もって山のように高い雪の中に突っ込んで埋もれてしまった飼い主さん。……あれはやりすぎだったなって、一応後悔してるのですよ……。

「むむ……とにかく、私はやり過ぎてしまうから、気をつけなさいって、手を上げては駄目って教わりました」
「それは———兎の頃の話だろうが」
「そうですけど…でも、私の力って人より強いです…」
「……でも嫌な時は嫌だって言え。言っても聞かない時は暴れてしまえ。我慢はよくないぞ……ほら、茶」
「ありがとうございます」
「お前は若い娘なんだから、余計———なんだ、そういう…身体を触ろうとしたりとか嫌な事してくる人間にははっきり拒絶しろ。きっちり落とし前つけるんだ。……そういう所はチェダーを見習え」
「はい……ああ、そう言えば、スウィーツさんが言ってました」
「…なんて？」

「『やられたらやり返す、またやらかそうなんて考えないくらいに絞り盗るのがハンターだ。太く逞しく生きるんだぞ』って。それが――――…これ、なんですが」

食事の席に相応しくないと骨髄を片付けようとする猫達を指すと、飼い主さんは「ハンターじゃねえよ、それ…」と頭を掻きました。

「――――じゃあ今度は飼い主さんの番です！ねえねえ、砂漠を渡る舟ってどんなのなんですか？大きなモンスターと戦ったんですか？」

「あー…黒は絶対あのクエストを受けない方が良いぞ。耳がやられる」

「えー？」

＊

ご飯を食べて、家事をしてくれる猫さん達にお礼を言った後、私は風通りの良い窓を見ながら、飼い主さんに薬を塗ってもらいました。

「……ていうか、なんでこんなにざっくりしてんだ？お前はどうい

う林檎の剥き方をしたんだ」
「ただ普通に…林檎の兎を作ろうとして失敗しただけなのですが」
「だからその林檎の兎をどう失敗したらこうなるんだよ――――ていうかお前、この状態でクエスト行ったのか…本当に馬鹿だな」
「（，・ω・、）」
「服捲れ――――上げ過ぎ！下げろッ」
「（，・ω・、）」
「まったく…」

もう少し恥じらいを持て、と言いながら薬を塗ってくれる飼い主さん。
私がずっと（，・ω・、）な顔をしていたら、しばらく黙ってから話題を変えてくれました。

「――――あのドスファンゴの牙を折ったのはお前か？」
「はい。ぼっきりやりました」
「途中、牙が粉々になってたり三分の一の長さでそこらを転がっていたんだが――――お前はどんな殴り方をしたんだ」
「思わず兎の頃の怒りがですね…例え負けても牙だけは折ってやると意気込んでました」
「仲悪いのかよ」
「ええ。だって酷いんですよ！寝てたらぶつかってくるし、誰かと遊んでたら邪魔するし、ご飯を滅茶苦茶にされたり妨害してきたり…」
「むしろドスファンゴ凄くないか、当時のでかくて凶暴なお前に食ってかかるとか」
「凶暴じゃないです！」
「……人を雪の中に埋めといてそれを言うか」

「……（、・ω・、）」

全部の傷を塗って包帯を巻いたりガーゼを貼り終えたのを再確認すると、飼い主さんはさっさと薬を仕舞おうとするので、きゅ、と握って止めました。

「どうした」
「飼い主さんは、薬を塗らないのですか？」
「俺は草で切ったくらいだからな」
「私が草で切った所は塗ってくれたじゃないですか」
「そりゃ…女なんだ、傷は無い方がいいだろうと思って…」
「この前、チェダーさんが怪我をした時は唾でも付けてろって言ってたじゃないですか」
「あいつはいいんだ」
「よくないです。……さっきのお礼に、私が塗ります。怪我した所出して下さいな」
「———…分かったから脱がそうとするな。腹を草で切る訳ないだろ」
「ドスファンゴとか…」
「反撃する前に（上級装備で）狩ったからな」
「砂漠のクエストとか…」
「頬を薄く切ったくらいだ———ってちょっと待て、その薬じゃないぞ」
「これですね！……はい、ぺたー」
「……」

いつもしがみついたり抱きついたり（偶に）撫でてくれる飼い主さんの腕……案外古傷が多いのですね。

色々苦労なさってる腕に、私はゆっくりと薬を塗り込みました。

「……よし、と。次は頬っぺたです」
「もう塞がって———そんなに薬はいらん。戻せ」
「これ位…ですか？」
「そ」
「いきますよー。はい、ぺたー」
「……お前、遊んでるだろ」
「ぺたー」
「……」

包帯だらけの手で飼い主さんの顔にぺたぺた触れながら、もう片方の手はゆっくり優しく塗っていきます。
そして私と同じく傷口を塞ぐと、飼い主さんが隣に置いていた桶に浸した手拭いで手を拭いてくれました。

そして今度こそお薬を仕舞い、二人の汚れを落とした桶を猫に渡す飼い主さんの背後で、私は大事に仕舞っていた髪飾りを引っ張り出します。

———今日は何処にも行かない（というか行けない）けど、防具を着ない日は付けていたいのです。本当は毎日付けていたいのですけど……。

「飼い主さん、飼い主さん」
「あー？」
「髪飾り、付けて欲しいのです」

「それぐらい自分で……あー…貸せ」

別に付けれない事もないのですけど、飼い主さんは断らずに髪飾りを受け取ると、先程の椅子に座るように言います。
飼い主さんが背後でガタガタ音をたてては数歩歩み寄って、また戻ったりを何度か繰り返す間、私は足をぷらぷらして待っていました。

しばらくして飼い主さんは戻ってきた訳ですが、私に何も話しかけずに、まごつきながら髪を梳かします。
最後にしゃりしゃり音がする青い硝子の髪飾りをごつごつした手で添えると、「よし、」と小さな声を出して、私に――――小さな櫛を、差し出しました。

「これは……？」

木彫りの花――――大きく咲いているのが二つ、小さいのが三つ、蕾が一つ彫られている櫛は、お家には無かったものです。

「……ちょうど船待ってたら良い露店があってな。前に髪飾りを買った事だし、櫛でもやればちょうどいいかなっていうか…順序逆だったなとか…とにかくっ今回の土産だ」
「……」
「……いらないなら別に…」

黙って彫られた花をなぞっていると、飼い主さんは小さくそう呟きました。

「……飼い主さん」
「――――あ、ああ？」
「……ありがとう、ございます」
「……ああ、うん」
「とても可愛らしいです。…嬉しい」

チェダーさんならもっと上手に、たくさんの言葉で感謝の言葉を言えるのでしょうけど、今の私に、これ以上の言葉は思いつかなくて。

「――――じゃあお礼に、飼い主さんの髪を毎日梳かしてさしあげます」
「えっ」

＊
※二人は交際しておりません。これが本来の二人の生活ぶりです。

5．甘えん坊な性格です（後書き）

オマケ

ちなみに咲ちゃんのラッキースケベタイム時の二人の体勢←

咲ちゃん⇒がばっと起きて振り向いて説教してたら気付かぬ内に夜ちゃんに少し迫ってた（つまり前のめり）

夜ちゃん⇒咲が起きる反動で尻餅付いた風になる。後ろに仰け反ったせいで胸元ぎりぎり。足も開いた状態なのでぎりぎり。
咲ちゃんが説教に夢中で前のめりに迫っていた際、太腿とか触られてたけど全然気にしてなかった。そのせいで咲ちゃんも反応遅れた。

→という無茶でありえない体制でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9129z/

雪の中からこんにちは、飼い主さん！

2011年12月31日18時47分発行